

# 尖閣有事で甦るミグ25事件

— ソ連軍ゲリラを撃滅せよ —

大貫 悦司 陸自61

尖閣有事が秒読み段階に入る中、想起されるのがミグ25事件をめぐる展開された陸上自衛隊による初の「防衛出動」である。陸海空自衛隊の積極的な対応が功を奏したのか、想定された「ソ連軍ゲリラ、函館空港襲撃」事態には至らず、「防衛出動」は戦火を交えることなく幕を閉じた。が、そこで展開された陸上自衛隊員たちの行動は、有事そのままの決死的なもので尖閣有事に通底するが、闇に葬られたままである。

思い起こせば、自分とミグ25事件の関わりは、第11師団司令部法務官としてミグ25事件で主要な役割を演じた大小田八尋氏（陸自62）が離任後、一人おいて同法務官に就任したことに始まる。が、ミグ25事件に触れる人は誰一人いない。4年後、大小田氏が課長を務める北部方面総監部法務課に転動したが、氏もミグ25事件を語ることはなかった。防衛出動を闇に葬ろうとする圧力があまり

にも強く、口をつぐまざるをえなかったということかもしれない。が、何事にも積極果敢に挑戦する氏の人柄に共鳴。いつしか友情が芽生え、同志の域まで高まっていた。

とりわけ交流が密になるのは双方が退職したあとである。自分が自衛隊を依願退職し、石原慎太郎、亀井静香、平沼赳夫氏らが旗揚げした自民党派閥横断型政策行動集団「黎明の会」の事務局長に就任。石原氏の影響もあつてか執筆を開始。合わせることのように大小田氏も執筆への意欲を高め、のちのち出版することになる数冊の本の手始めとはいへ、乾坤一擲の思いを込めて取り組んだのが「ミグ25事件の真相」（学研）である。

同書の出版は、大小田氏の抜きん出た情報収集能力とミグ25事件の真相を歴史に刻みたいとの熱き思いが原動力となつている。自分もその思いに応えるべく一体となつて執筆に取り組み、メインタイトルを「闇に葬られた防衛出動」、サブタイトルを「ミグ25事件の真相」と定め、終日、ワープロを打ち続けた。が、販売戦略をふまえ判断したのであるうか、編集のプロがメインタイトルは「ミ

グ25事件の真相」がふさわしいと提案。政治的意味合いが込められた闇に葬られた防衛出動」はサブタイトルに落ち着いた。

幸い、好評を得て増刷、多くの方に読んでいただいた。マスメディアも関心を抱き、映像化を勧める者まで現われた。それは、いつしか氏の夢となり、自分も関与していくことになるが、生易しいものではなく、時は流れていった。

そのようなとき尖閣有事が切迫。ミグ25事件で防衛出動した自衛隊員たちの決死的行動は得難い先例となるはずだが、いまや風前の灯。自衛隊員はもとより国民の記憶を呼び戻したいとの思いは日ごとに募り、「ミグ25事件の真相」を補修修正し、再販するという道を模索した。

が、そのレベルでは二番煎じの感は否めず、発信力に乏しい。考えあぐねていたところ、その道のプロから、いつそのこと、誰もが手に取って読みたくなるような小説に衣更えしてはどうかと助言された。事件を映像化したいとの大小田氏のたつての願いを実現する大きな一歩にもなることから願ったりかなったりで、小説風にリライトすることに決定。

その際、本事件で主要な役割を演じた大小田法務官の言動が手前味噌に映らないよう共著の形をとることにした。

ところが執筆の途中、氏は無念にも脳梗塞で倒れ、並行して進めていた『義の日米同盟』（共著）とも合わせ、完成品を見ることなく帰らぬ人となった。もはや自分一人で作業を進めるしかない。氏の思いがにじみ出るよう、タイトルを「ソ連軍ゲリラを撃滅せよ—ミグ25事件で防衛出動した自衛隊員たちの決死的行動」に修正。全体像、とりわけ次の点がより浮き彫りになるよう留意しつつ執筆し、このたびアマゾンから電子書籍（10月、アマゾン指定の価格で紙の本を出版）として出版する運びとなった。

① 防衛出動に関わった自衛隊員たちの覚悟と苦悩  
② 事なかれ政治に翻弄され、精神的に大死にしたのも同然の状態に置かれたままの自衛隊員たちの無念な思い  
本書を通じ、遺書まで書き、決死の覚悟で防衛出動した自衛隊員たちの祖国への思いがそのままに国民に伝わるとともに、政治がそれを蔽

肅に受け止め、歴史に刻むことを切に願っている。

(注) 本書籍を出版して1カ月後、booksmeterなるものが、アメリカ・ニュージャージー州にあるサーバー経由で海賊版を出版した。メインタイトルに「download」を冠し『downloadソ連軍ゲリラを撃滅せよ』としているほか、サブタイトル、表紙の色もまったく同じで、警察によると個人情報窃取が目的の可能性ありとのことゆえ、downloadしないようくれぐれも留意されたい。